学びを深めるために視野を広げよう

氏名	川野 貴光	
学校名	福島県 日本大学東北高等学校	
担当教科名	数学	
実践教科名	LHR (6時間) ふくしまグローバルセミナー(1時間) 本校特別講座(1時間)	
対象生徒(学年)	高校2年生	
対象人数	24名	

実践全体について

I. 実践の目的

(日本大学東北高等学校Ⅱコース)

私の所属する日本大学東北高等学校は日本大学の直属の付属高校である。その中で私は国公立大学進学を目標とするⅡコースの担任をしている。生徒は毎日5時半まで授業を受け、課題もたくさん出される。部活動には参加できない。本校Ⅱコースでの高校3年間は、受験を乗り越えるために必死になるためのものである。そのため、クラスの雰囲気としては受験に直結するもの以外はなるべく取り除く雰囲気がある。ただし、生徒一人ひとりは非常に優しい心の持ち主ばかりである。他者に対する気配りや、社会的規範意識も高い。そのような子供たちが、広い世界に目を向け、社会に貢献できる人物へと育っていくためにどの様な授業を展開するのかそして、どのような体験が生徒たちの心に響くのかを考えたいと思ったことが実践の一番の目的となった。はっきり言って学校の勉強に関しては優秀な子供たちである。その子供たちにもっと大きな目的意識や、学ぶ意義や、他者を受け入れる気持ちを身に付けて欲しいというのがこの授業の実践の目的である。

(ふくしまグローバルセミナー) 12月14日(60分)

2次研修で講義をして頂いた野澤先生(青森県横浜町立横浜中学校)の「カカオ豆貿易ゲーム」をモデルに、カカオ豆貿易ゲームを通して、ガーナや日本をはじめ、世界に目を向けてもらうことを目的とした。

(日本大学東北高等学校特別講座) 1月26日予定(90分)(対象人数50人)

本校3年生を対象に毎年開かれる特別講座で講座を開くことになった。高校卒業後の進路が国際関係に関連する者(日本大学国際関係学部進学予定者)と講座参加希望者が対象である。進路先が国際関係学部であるからと言ってあまり深く国際理解や国際協力について考えていない生徒である。その生徒たちにグローバルセミナーと同様にカカオ豆貿易ゲームを中心とする活動を通して、世界の貧困について考えてもらうことを目的としている。また、大学入学後は自分たちの出来ることを探し、それをアクションに移せるようになることも目的としている。

Ⅱ 授業の構成案

本校2年14組24名・LHR

	時限・テーマ・ねらい	内容・方法	使用教材
1	ガーナを知ろう① 自らの想像力を働かせ、それ を表現させる	ガーナと聞いて思い浮かぶことを話し合わせ、それを絵にしてみる。	アフリカの地図世界地図
2	ガーナを知ろう② 自分が表現したものと現実を 比較させる	自分たちが書いたガーナの世界と、写 真の世界の違いを確認する。 (フォトランゲージ)	ガーナ研修の際の写真
3	国際協力とは 国際理解という言葉について 深く考えさせる	国際協力とはどういうことかを文章に してみる。お互いがどのように感じた かを確認する。(フォトランゲージ)	ガーナ研修の際の写真
4	チョコレートについて チョコレートとカカオの関係 についての知識を与える	カカオ豆とチョコレートの資料を提示。 そこから見えることを確認する。 (フォトランゲージ)	ガーナ研修の際の写真 ガーナチョコレート
5	アフリカの保健① マラリアについて知る	マラリアとはどのような病気か知る。 そこから分かることを確認する。	パワーポイント資料
6	アフリカの保健② 「国際寄生虫西アフリカセン タープロジェクト」の活動内 容を知る	「国際寄生虫西アフリカセンタープロジェクト」の活動について知る。そこから分かることを確認する。	パワーポイント資料

以上のようになっているが、まだまだこの「学びを深めるために視野を広げよう」は完結していない。もっともっと様々な知識を吸収し、そこから「国際理解・国際協力」というキーワードにつなげていく予定である。

Ⅲ 授業実践の詳細

1時限目 ガーナを知ろう①

- i 世界地図とアフリカの地図を提示し、ガーナという国の場所や大きさを確認。 ガーナがアフリカにあることも知らない生徒も多数いたし、ガーナはもっと国土の広い国であると 思っていた生徒も多数いた。
- ii ガーナ (アフリカ) という地域の印象をグループごとに話し合わせる。その国にいるとして、そこで見えるであろう風景、人々の様子など、他者がどのように考えているか確認する。(それまでに学んできたことを思い返してみる)
- iii 一人一枚画用紙を渡し、i、iiを通して自分が思い描くガーナを描いてみる。

生徒の反応

アフリカという地域をひとくくりに考えている生徒が異常に多い (ガーナと聞いても知っていることが少ない)。砂漠、ジャングル、ピラミッド、貧困、黒人、飢餓、チョコレート、紛争、家族の仲が良い、理解出来ない言語といった印象が多かった。そして、実際に書かれた絵もそのようなものが多かった。

次回の授業でガーナの写真を見せることを予告した。

ただし、アジアという地域をひとくくりに見られるということに違和感がないか?という問いだけして終了した。(すぐ反応する生徒が見られる)

2時限目 ガーナを知るう②

- i 前時で書いた絵を掲示しながら、フォトランゲージで実施。
 - この時間で見せた写真は、ガーナの風景、人並みを中心にした。少し予習をしてきたような生徒もいたが、とにかくこの研修で見てきた町や人々の生活の様子などを解説を加えながら見せた。また、ガーナの情報について提示した。
- ii 写真を見た感想を小グループごとに確認。他者がどのように感じたのかを知ってもらった。

生徒の反応

思い描くガーナ(アフリカ)との違いに戸惑いと共に興味を持つような発言が多かった。ラクダが歩いていないこと、車がたくさん走っていること、大きな建物が多いこと、首都やマーケットには人がたくさんいること、英語が公用語であること…。自分たちが想像したものとのギャップに気が付いているようであった。

特に、ガーナではなくアフリカの印象でしか考えられなかった生徒は、近代化されつつある様子に戸惑っていたようであった。

本時のねらいとして挙げた、自分たちの想像との違いは明確にし、未知のものへ興味や関心を持つことの心地よさを伝えることが出来た。

3時限目 国際協力とは

- i 生徒たちが今現在考えている国際協力とはどんなことか?を、文章にする。
- ii 何故、私がこの研修に参加したのかの報告。 ガーナの隊員の活動の紹介。

生徒の反応i

多い意見は募金、物資の援助、技術支援、ボランティア活動。ただし、それが国際協力であるという断定はしない生徒が目立つ。一方的な技術支援などが本当に役立つことなのか?ということへの戸惑いを書く生徒も多い。高校生となり少し大人になってきた子供達が、多面的に物事をとらえている象徴だと感じた。

また、国際協力が一部の人の活動で終わっているのではないかという意見があった。全くどんな活動をしているのか知らない人の方が多いのではないか?ということだ。そうならないためにも、もっと国

民が世界について興味を持つことが必要なのではという考えであった。

その他にも、国際協力というものに触れてみたいという意見も出た。どんな活動が行われているのか? 知るだけでもいいから教えて欲しいという考えであった。

生徒の反応 ii

シニアボランティアの存在が生徒には新鮮に映ったようであった。制度そのものに関心を示す生徒もいた。若者の協力隊ばかり想像していたようで、何故、そのような年齢で活動に参加しようと思ったのか?という関心があったようだ。また、教員として活動している方以外の活動にも興味を示していた。特に、HIV陽性者女性を中心としたガーナのNGOを支援している隊員の紹介には関心があった。

4時限目 チョコレートについて

- i カカオ農園、カカオの実などのフォトランゲージ。
- ii ガーナを中心に世界のカカオ豆の産出量とチョコレート産出量の提示。 この結果から分かることはどんなことか考えてもらう。
- iii 児童労働についての資料の提示。 貧困とはどういうことか?小グループで意見交換。

生徒の反応(・)

カカオ豆に驚いた様子であった。ただし、何故、ガーナでチョコレートが製造出来ないのか?という発問があった。これについては詳しくは触れず、チョコレートが製造出来ない裏側に隠れているものを考えるという意味で iii に入った。

生徒の反応調

児童労働の資料を読んで、子供達は声が出てこなかった。すぐに何かを考えていく元気がないように見えた。また、私自身、「このような実態を解決していく方法は何ですか?」という発問に私自身も戸惑ってしまった。ただし、フェアトレードという言葉とシステムを説明すると、関心を示してくれる生徒が多くいた。協力し合う世界を作り出すことが大切なのだという意見も出た。

最後に、前時に出た意見の「もっと知りたい」という素晴らしい姿勢は、その裏に隠れている知りたくないような悲しい事実も知る覚悟が必要であることを伝えた。

5時限目 アフリカの保健① マラリアについて知る

- i マラリアという病気について、パワーポイント資料を利用して説明。
- ii 野口英世アフリカ賞についての資料の提示。
- iii 医療という観点からの国際協力について考える。

生徒の反応i

アフリカの病気というとエイズそして栄養失調という印象が強かった。マラリアとはどんな病気なのか分かる生徒はほとんどいなかった。これほどまでに世界で広まっていることに驚いた様子だった。また、生物学的にマラリアの仕組みや感染症に興味を持つ生徒もいた。

生徒の反応 ii ・iii

これまでの授業とは異なり、国際協力という観点より、マラリアそのものに興味をもつ生徒が多くいた。また、野口英世アフリカ賞の存在はあまり認知されておらず、福島で生活し、教壇に立つ者として寂しく感じた。ただし、受賞者であるブライアン・グリーンウッド氏の業績である殺虫剤を染み込ませた蚊帳の存在は、もの作りの面から見て関心を示す生徒がいた。

6時限目 アフリカの保健② 「国際寄生虫西アフリカセンタープロジェクト」の活動内容を知る

- i 野口研究所について。
- ii 「国際寄生虫西アフリカセンタープロジェクト」の活動内容について、パワーポイント資料を利用 して説明。
- iii 保健活動を通した国際協力について知る。

生徒の反応

日本政府の無償援助で設立されたこの野口研究所の存在は、生徒にとってとても新鮮に映ったようだ。 具体的な支援の形が見れたことで、「ODA」という言葉を実感してくれたように見えた。国際協力にお ける技術支援は生徒たちにとって大きく、すこしぼやけてしまっているように見えたが、本時における 「国際寄生虫西アフリカセンタープロジェクト」は明確に生徒に伝わった。

Ⅳ 実践の成果

「学びを深めるために視野を広げよう」というタイトルのもと、授業を進めてきた。この授業の成果が出てくるのを期待するのはいつにしたらいいのであろうか?欲を言えば、授業の直後から目をキラキラさせて、色々なことにアンテナを張り、興味があることはすぐにでも行動に移してくれるのがありがたいことなのだが…。現実的には、まだそうはなっていない。だからと言って、授業の成果がまったく出ていないのかと言えばそうでもない。

子供達は、それまで全く関心のなかった国「ガーナ」に、担任が研修に行ったことをきっかけに、少しずつ世界を広げていった。教えられて分かることの他に、その背景に隠れているようなことを考えてみるようになってきた。関心を示すようになった。そのことが、現時点での一番大きな実践の成果である。知識を与えることが出来たという成果もあるがそれは二の次である。そして、これらの授業を受けた生徒のうち一人でも良いのでその様な進路をたどっていく人材に育つことが、最大の成果となるであろう。

V 課題

この海外研修を通した実践としての課題は、知識の伝達に終始している点である。第一の段階としては それを目標にしてきたこともあるが、この先、様々な教材を活かして、参加型のワークショップを体験さ せることも生徒には必要である。そのためにも、私自身がもっと学ばなくてはならないことを感じずには いられない。例えば、貧困という言葉をとっても、自分が考える貧困の和は一次元的であった。多くの問 題を立体的に捉え、生徒に伝えていくことが出来なかったと思う。その様な点も改善しつつ、今後の指導 に当てていきたい。

そして、数学科としての取り組みが出来なかった点も課題である。このことに関しては、初めから今の 生徒に対しては実践出来ないと考えていたが、大きな課題の一つである。ただし、統計的なテーマは持て そうなので、今後の課題として取り組んでいきたい。

また、この研修に参加した目的の一つに、学校として「国際理解教育」を普及させていきたいということを掲げてきた。本校は幸いにして私立学校ということで、腰を据えて活動できるメリットがある。ただし、それまで全く「国際理解教育」には無関心な学校である。この実態をしっかり受け止め、このような活動に賛同してくれる仲間を増やしていく必要性がある。実はこのことが自分にとっては大きな課題である。そのために、本校で実施されている特別講座に積極的に参加して行きたいと思う。

最後に、この研修に参加し、多くの出会いを持てたことは自分にとって最大の財産である。研修中はもちろんのこと、研修後も授業実践に向けて連絡を取り合えた。自分が挫けそうになったとき支えとなったのは仲間の存在であった。その様な仲間との出会いを導いてくれたJICAに感謝し、結びとしたい。

VI 参考資料

世界人口白書2008

WACIPAC事業を理解していただくための国際保健 粟澤俊樹氏 (パワーポイント) ほっとけない世界のまずしさ (扶桑社) 1人ひとりにできること 1人のためにできること (国際協力機構・編)

参考HP

奴隷解放チョコレート http://www.ochanoma.info/sc_choco.html 内閣府 野口英世アフリカ賞 http://www.cao.go.jp/noguchisho/index.html

ふくしまグローバルセミナー講座

福島県日本大学東北高等学校川野貴光福島市立平野小学校渡邊太

- 1 講座名チョコレートの裏側 in ガーナ
- 2 日 時 平成20年12月14日(日) 60分間
- 3 ねらい カカオ豆貿易ゲームを通して、貧困を生みだすしくみについて知ってもらい、貧困について 深く考えてもらう
- 4 場 所 JICA二本松 大講堂
- 5 講座参加者 41名
- 6 講座実施内容

☆準備

教師海外研修参加者(2名)は商社役としてゲームに参加。 残りの39人を4人ずつ10のグループに分ける。その際、カカオ生産国(7カ国)

チョコレート生産国(3カ国)とする。

各国にハサミ2つ、クレパス2本、A4の用紙30枚配布し、長机2つと椅子は人数分準備した。 また、各国にカカオ豆の型紙2つ(チョコレートの型紙2つ)と紙幣を準備した。

☆ 講座の展開

- 1 ガーナ(教師海外研修)の紹介(10分)
- 2 グループ内の自己紹介(5分)
- 3 カカオ豆貿易ゲーム(35分)
- 4 振り返り(10分)

☆ カカオ豆貿易ゲーム

※ ルール

- ・お金を一番儲けたチームが勝ち。
- ・与えられた道具以外を使用してはならない。
- ・A国は持ち金0、B国は持ち金100jojo。
- ・A国は、カカオ豆の型紙を利用してハサミで切り抜き、色を塗ったら出荷出来る。
- ・B国は、カカオ豆を商社から買い取り、裏に色を塗って、チョコの型紙で切り取ったら出荷できる。
- ・カカオ豆は、商社が6個を10jojoで買い取る。
- ・商社はB国に6個20jojoでカカオ豆を売る。
- ・チョコレートは、商社が1箱(カカオの実1つから1箱生産できる)を10jojoで買い取る。

- ・原材料であるカカオ豆の型紙、紙、クレパスは、他国に売ったり、貸したりしてはならない。
- ・商品を輸出する場合は、必ず商社を通すこと。
- ・生産した商品が粗悪だった場合、商社は買い取りを拒否する。
- ・各国間の交流は、ルールで制限されたもの以外は自由。
- ・制限時間がきたら、手持ち金を講師に報告する。

※ 展開

- 1 グループ分けは事前に名簿より所属や年齢などが偏らないようにこちらで決定
- 2 ルールを説明(5分間)
- 3 資材を確認し作業開始
- 4 商社は、カカオの買い取りは非常に厳しく、チョコレートは多少形が悪くてもどんどん買い取るようにした。
- 5 カカオ生産国はカカオの色や形が悪いということで商社に買い取ってもらえない。
- 6 カカオが商社に売られるとすぐにチョコレート生産国はカカオを買い取り、チョコレートに し、収入を得ることが出来る。(10分経過)
- 7 天候不順により、カカオ生産国の手持ちのカカオを廃棄するように指示(17分経過) (商社の指示によりカカオ生産国は丁寧にカカオを作っていた。そして、かなりカカオをため 込んでいたため相当の被害となった。)
- 8 チョコレート生産国は、カカオの無駄を出ないようにしたり、色を薄く塗ることで新しい商品を開発する国もあり、順調に売り上げを伸ばす。
 - カカオ生産国は、厳しい指導を受けながらも少しずつ売上を伸ばす。(22分経過)
- 9 カカオの暴落(25分経過)カカオ豆の価格を半額にする。(過剰生産のため)
- 10 (30分経過)終了
- 11 各国の収益の発表

※ 振り返り

- ・結果発表。(3分)
- ・このゲームを通しての感想を各グループで話し合ってもらう。(3分)
- ・カカオ豆やチョコレートをめぐる貿易の流れについて、そして、貧困が生み出すものは何かの説明(貧困の輪)(5分)

(貧困の輪についてはそれまでの講座の中でも話合われていて、参加者の理解はかなり深い。)

・我々が出来ることは何か話し合ってもらい、発表。(5分)→ほとんど時間が取れない。

※ ゲームを通しての感想

	一人を通じての感念
1	面倒くさい。頑張っても稼げない。これしか仕事がないのでやるしかない。最後は諦めた。あ きらかにチョコレートを作る側の方が儲かる。他の仕事をくれ!
2	他の産業(もっと儲かる産業)がない。技術がない。 新しい産業を始める為の知識と技術が必要。
3	チョコレートを作る技術。原価を決定する権利。
4	疲れる作業なのに、儲からない。タイミングが悪くびっくりした。 運が悪いと儲からない。
5	労働量の割に売りに行ったが10jojoで切なくなった。たくさん作っていたのに腐って売れなくなったときにはショック。暴落して労働量が増えたのにお金が一緒なのもショック。品質チェックが厳しくて大変だった。 カカオ豆農業に依存しすぎている→カカオ以外の農業を発展させる。 カカオ豆生産だけでチョコレートにする技術がない→自国で豆からチョコレートまで生産。商社がもっとカカオを高く買うべき。
	カカオ豆生産者の立場が商社の下にあるので、交渉術をつける。
6	商社の要求が厳しかった(一生懸命作ったのだから買い取って)。収入が不安定。
7	思ったより作業がはかどらなかった。急いで雑にしたら買ってもらえなかった。作るのが大変だった。一人ではできない作業なので協調性が大切だと思う。商社の人の意地悪な対応にガーナの人たちの大変さが分かった。商社の人たちの言うなりの値段でカカオを売らなくてはならないので大変不満だった。
8	暴落がショックだった。商社のチェックが厳しい。
9	一次産業に依存。商社に牛耳られている。経済の知識がない。コートジボアールとカルテルを 結ぶ。生産直販。カカオ豆の格付け。他の産業も興す。
10	フェアトレードを世界に広める。一次製品を生活できる価格で先進国が買い取るシステムを確立する。一次産品の輸出、貿易で利益を得るのが難しい。 貧困→教育を受けられない→技術がない。工場がない。
11	適当に切っても全部買い取ってもらった。豆に色を塗るより楽だった。
12	カカオ豆を作る方が大変そう。天候に左右されない(チョコ)。チョコレートの色や大きさが揃っていなくても買い取ってもらえた(カカオ豆は厳しかった)。カカオの余っているところを利用してもチョコが出来ると思った。材料が余っているのがもったいない。ガーナから直接買えば良かった。
13	生産者はつらい労働を強いられているのにお金はほんの少ししか入らず、とても不公平で理不 尽だと思った。つらい仕事をした人にはそれに見合った収入があるべきだからそこの体制を換 えてほしい。

14	貧困の差などよくわかった。不平等だけど、これが現実なのかなって思った。
15	カカオは丁寧に作業しないと売れないということが分かりました。
. 1	私は卒業論文でチョコレートについて書きます。そして、ガーナ・コートジボワールの貧困・ 児童労働・環境問題について書き、フェアトレードを行うことの大切さを伝えたいと思ってい ます。このゲームで、貿易の不公平さを実感できてよかったです。
17	作っても作っても自国で原価を決めたり出来ないのが悪いかもしれないです。日本のコメ農家 もそうですが。アラブの大富豪のようにチョコレート成金が生まれてもいいはずなのに…。
18	ゲームをしてこのような結果になることに驚きました。経済、品質、不平等な貿易…。貧困の 輪を知恵を出し合ってなくしていければと思いました。
19	頑張って作ったカカオを紙一枚で買い上げられてショックでした。品質に関しても厳しく言われ、生産者の弱さを感じました。ゲームを通して生産者の大変さがよく分かりました。実際にはもっと比べものにならないでしょうが…。
20	ゲームではありましたが、実際に班で実践してみて改めて貿易の大変さを思い知らされました。 また、一位のチームは余ったカカオからも小さなチョコレートを作り、考えながら生産してい るところに関心を持ちました。
21	私たちはチョコレートを作る役をやったが、カカオは粗悪品だと商社が買い取ってくれない場合があったが、チョコレートはあまり品質が良くなくてもきちんと買い取ってもらえた。これが現実に起こっていることならよくないことだと思う。

(原文そのまま)

☆ 講座を終えての反省・感想

振り返りが上手くできなかった。貧困について深く考えてもらうことを目的としていたが、参加者は不平等貿易の在り方に目が向いてしまったように思う。(何故自分の国でチョコレートの生産が出来ないのか?価格の決定を自分たちで出来ないのは何故か?といった疑問を参加者は抱いたようであった。) それはそれで良いと思うが、少し視点をずらしてしまったのではないかと思う。

そしてやはりじっくり考えてもらう時間が取れなかったことが一番の反省。初めから時間に制限が あったので分かってはいたが、もっと他者の意見に耳を傾けたり、意見交換を交わしたりする時間が必 要である。今後のこのような活動の際には十分に留意したい点である。

また、本講座には多くの高校生が参加してくれた。大学生も多くいた。当然社会人の方もいたが、若い世代に考えるきっかけを与えられた点は評価できると思う。今後もこのような活動を通して、国際協力や国際理解といったことに目を向けさせていきたいと思う。

ガーナと日本の違いから学ぶこと

氏名	大内 伸代
学校名	福島県二本松市立二本松第一中学校
担当教科名	英語
実践教科名	英語、総合的な学習の時間
時間数	4/6時間
対象生徒(学年)	英語 1年1組~1年4組(各1時間) 2年4組(5時間) 総合的な学習の時間 1年4組(3時間)
対象人数	1 学年(25名×4クラス) 2 学年(32名×1クラス)

学習指導要領:総合的な学習の時間 第1 目標

横断的・総合的で探求的な学習を通して、自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育成するとともに、学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探求活動に主体的・創造的・協同的に取り組む態度を育て、自己の生き方を考えることができるようにする。

第3 指導計画の作成と内容の取扱い

- 1. 指導計画の作成に当たっては、次の事項に配慮するものとする。
 - (5) 学習活動については、学校の実態に応じて、例えば国際理解、情報、環境、福祉・健康などの横断的・総合的な課題についての学習活動、生徒の興味・関心に基づく課題についての学習活動、地域や学校の特色に応じた課題についての学習活動、職業や自己の将来に関する学習活動などを行うこと。

実践全体について

I、実践の目的

- ①カカオ豆がどのようにしてできるかを調べる事を通じて、福島との接点(野口英世)、ガーナの歴史を 学び、ガーナを知る。
- ②ガーナと中学生との手紙での交流を通じて、英語に興味・関心を持たせる。
- ③ガーナと日本の生活の違いや共通する点などを英語で学び、文化や生活習慣の違いを感じ取らせる。
- ④カカオ豆貿易ゲームを通じて、途上国と先進国との違いを学ぶことで、今後、途上国とどのようにかか わっていくかを考える。

Ⅱ. 授業の構成案

時限・テーマ・ねらい	方法・内容	使用教材
1・2時間目(英語)(2年生) テーマ:ガーナの子供たちに手紙を書く ねらい:手紙を書くことでガーナに興味関 心を持たせ、また、英語で手紙を書くこ とで、英語で聞きたい事を自己表現する。	ガーナに行く前に、グループ(1 グループ:5人~6人)毎に、生徒たちからガーナの子供たちに手紙を書き、交換して、日本に持ち帰り渡す。	手紙フォーマット
3・4時間目(英語)(2年生) テーマ:ガーナの子供たちからの返事 ねらい:ガーナの子供たちの返事から、外 国から返事が来ることで、英語はコミュニ ケーションをとる上で必要になることを認 識させる。また、翻訳することで、今まで 知らなかった単語や文法の表現を学ぶ。	ガーナから持ち帰った手紙を生徒に翻訳させる。 前回、手紙を書いたグループ毎に集まり、翻訳させる。ガーナからの手紙と翻訳した手紙を廊下に掲示する。	辞書
5・6時間目 (英語) テーマ:インタビュー ねらい:・1 want to be~. を使って、生徒 が考え表現できるような活動を行う(2 年生)。 ・What do you do?を使って、生徒が自 己表現できる(1年生)。	手工芸隊員の活動先にお手伝いとして参加していたガーナの女の子にインタビューを行って、インタビューした内容を、生徒に予想させて当てさせる。(2年生) 理数科教師の隊員の活動先で、高校生にインタビューした内容について生徒が予想して、答えやすいように選択形式で記入させる。また、自分が何になりたいかを英語表現できるようにする。	
7時間目(総合的な学習の時間)(1年生) テーマ:ガーナを知ろう! ねらい:生徒が抱いていたガーナのイメージと、実際に、ガーナに行って学んだことや体験したことを発表し、説明により 一層理解を深めさせる。	パワーポイントを使って、説明する。 説明前の印象を記入させ、説明後の印 象の違いを記入させる。	プロジェクタ スクリーン 紙幣 ケンテ
8・9時間目(総合的な学習の時間)(1年生) テーマ:カカオ豆貿易ゲーム ねらい:・貿易される商品(原材料と加工 されて付加価値のついた商品)の価値(価格)に偏りがあることを知る。・原材料を 輸出する国の人々の思いを知る。(貧困 の輪を感じてもらう。)・先進国と発展途 上国間での国際協力の必要性を考える。・ ゲームを通じて、ガーナを体験させる。 また、途上国と先進国との違いを学び、 今後、途上国とどう関わっていくかを考 えさせる。	Ⅲ. 授業の詳細で記入	プロジェクタ スクリーン プリント カカオ豆型 チョンボクーピー 新幣 情報カードなど

Ⅲ. 授業の詳細

各授業の詳細や資料、生徒の反応など

1~4時間目(英語)

ガーナに行く前に2時間使って、5~6人を1グループとして、手紙を書いた。(書かせた内容はコピーを参照:別添1) 2学年全員に手紙を書かせ、ガーナに持って行った。

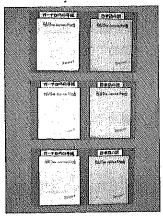
中華的語彙的理解的研究的語彙的理解的學生,不知為一個語彙的理解的理解的語彙的理解。例如其中的語彙的語彙的

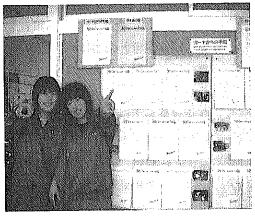
ガーナに手紙を書く話を始めると、生徒達は社会で使っている地図帳を出して、ガーナがどこにあるのかを調べ始めた。ガーナに興味関心を持ち始めていることを感じられた一時だった。

ガーナから戻り、2学期に入ると、英語の授業で、手紙を書いたグループごとに班を作り、ガーナからもらった手紙を生徒に渡し、訳をさせた。生徒達はガーナの子供達が書いた手紙の内容をみて、同じ中学生、小学生が書いたとは思えないような手紙の内容に驚いていた。それに加えて、何人かの生徒達はどう訳せばいいのか分からなく戸惑っていた。四苦八苦しながらも訳をする時間に2時間位設け、完成させた。

完成した手紙の訳は、貰った手紙と一緒に下記の写真のとおり、廊下に掲示した。







5時間目(英語)

2学年教科書P30~P31「Multi Plus 1 わたしの夢」の授業で、手工芸隊員の活動先で出会った女子学生に What do you want to be in the future ?の質問をこの単元に盛り込んで授業を行った。

始め、モデル文を読ませ、I want to be ~. の使い方をマスターした後に、プリントを配り、ガーナの手工芸隊員の活動先で出会った女子学生とのインタビュー内容を予想して記入させた。分からない生徒が多数いたので、ヒントを出して、答えを分かりやすくした。

(別添2:プリント)

6時間目(英語)

1 学年教科書P63 [Unit 7カナダの学校 Part 4 カナダの中学校] の本文で出てくる表現で、What do you do?の答え方を学習する際に、理数科教師の隊員の活動先で知り合った学生と話した内容をこの単元に盛り込んで授業を行った。

始め、What do you do?を発音し、意味を確認した。何回か生徒に発音させ、覚えさせた。その後に、 プリントを配り、選択問題として、答えさせた。(別添3:プリント)

フ時間目(総合的な学習の時間)

テーマ: ガーナを知ろう

ねらい:ガーナについて興味を持たせる。プレゼンテーションを始める前に、1年3組の生徒にガーナの 印象を紙に書かせた。圧倒的に「チョコレート」の印象が強いことが分かったので、チョコレートの原 料になるカカオ豆、ガーナと福島との共通点として野口英世についての話、歴史についてのプレゼン テーションを行うことによって、ガーナに興味関心を持てるような工夫を心がけた。

そこで、別添のようなプレゼンテーションを行った。

(別添4:パワーポイント「ガーナを知ろう」) (別添5:プリント)

〈 生徒の感想 〉

ガーナのことを学んでの感想

- 1. 奴隷を多く使っていたとは思わなかった。金がいっぱい取れなかったらどうなるのかと思った。 多くの自然物を利用した国だと思った。
- 2. ガーナでは昔、人を買取していたということがわかった。ガーナではカカオ豆だけでなく綿のもの を輸出していることがわかった。
- 3. ガーナでは、金がたくさん取れて、奴隷を輸入・輸出していた国だったと知りイメージが変わった。野口英世とのつながりがあることを初めて知った。ガーナはやっぱりチョコレートの国だ。
- 4. ガーナの面積は日本の3分の2だということがわかった。チョコになる前のカカオ豆の様子がよく わかった。
- 5. 自分が考えていたイメージとはぜんぜん違うと思った。ガーナの歴史やカカオのことなどいろいろなことがわかって楽しかった。
- 6. ガーナは結構、悲しい国、金の宝庫。
- 7. 野口英世が感染して死んでいるとは、信じられない。ガーナは日本の3分の2ということを初めて知った。
- 8. ガーナはいろいろな歴史がある。福島もガーナとの接点で、野口英世とつながっていたのですごい と思った。
- 9. 黒人が黒人を貿易で輸入していたのが意外だった。野口英世がなくなった場所がガーナだとはじめて知った。
- 10. ガーナの人たちは人を奴隷として扱っていたと聞いてがっかりした。チョコレートを作っている工程を知ることができ勉強になりました。
- 11. 奴隷の貿易をしていたとは…悲しいです。カカオが木の幹から出てくるとは驚きだった。福島とのつながりがあるのも驚きだった。
- 12. 福島とガーナの共通点が野口英世だというのはびっくりした。前よりはガーナのことがわかったと思う。
- 13. ガーナという国名は新しくてその前はゴールドコーストだった。ガーナには日本共通なところもあってびっくりした。ガーナでは日本で売っているチョコの原料になっている。
- 14. やっぱりチョコレートが有名だと思った。ガーナの国旗の赤は独立のために流した血をあらわすと聞いて、想像していたガーナとの違いにびっくりした。あまり奴隷とかのイメージがなかったので以外だった。
- 15. 最初は奴隷を買っていたが、今度は奴隷を売る側になっていたのが分かった。

8・9時間目(総合的な学習の時間)

国際理解教育(カカオ豆貿易ゲーム)指導案

平成20年12月17日(水) 5・6時間

場所:1年4組 指導者:大内 伸代

- 1. 授業名:カカオ豆貿易ゲーム (関連資料:別添6)
- 2. 本時のねらい
 - ・貿易される商品(原材料と加工されて付加価値のついた商品)の価値(価格)に偏りがあることを知る。
 - ・原材料を輸出する国の人々の思いを知る。(貧困の輪を感じてもらう。)
 - ・先進国と発展途上国間での国際協力の必要性を考える。
- 3. 必要な道具類

紙幣

紙

情報カード

感想を記入するワークシート

ルールの用紙、結果用紙

ガーナ

カカオ豆(カカオの実)の形をした型紙 オレンジ色のクレパスか色鉛筆 はさみ

先進国

チョコレートの型紙 はさみ(チョコレートをから切り取るため) こげ茶のクレパスか色鉛筆

指導事項	指導内容(教師の活動)	生徒の活動	留意点
導入	挨拶	挨拶	ワークシートを挨拶後に
(10分)	自分が知っている国について2分間で	2分間で思いつくまま	配る。
1:30	書いてみよう!	に記入する。	準備物:ワークシート、
\$			タイマー
1:40	記入後、その国の中で自分が一番行き	自分が行きたい国を一	生徒がなぜ行きたいのか
	たい国に○をつけさせる。	カ国○をつける。	をわからなくならないよ
	なぜ行きたいのかを3つ考えさせる。	生徒は、頭の中で考え	う、例題を出して、答え
	(30秒間)	る。	を導かせることに留意す
	例:海があるから		る。
	きれいな場所があるから		書かせるのではなく頭の
	有名な○○があるから		中だけで考えさせること
	食べ物がおいしいから		に留意する。
	なぜ行きたいかを友達に3つ出題し	教師の指示後、生徒は	
	て、自分が行きたい国を当ててもらう。	立ちあがり、教室内の	
		友達に話し始める。	

指導事項	指導内容 (教師の活動)	生徒の活動	留意点
展開	貿易ゲームに入る。		
(5分)			
1:40	ゲームのルールを説明する(別紙①)	生徒は説明を聞く。	
\$			
1:45			
1:45	ゲームを始める。	生徒は袋から材料を取	
S		り出して活動する。	
2:10	【イベント内容】		
(25分)	1. 鉄道開通でカカオをマーケットに	生徒は、教師が出した	生徒の進行状況によっ
	持っていく数の制限がなくなりま	イベントに沿って生徒	て、イベントを出してい
	した。	が活動する	くことに留意する。
	2. ヨーロッパ企業との輸出を直接で		ゲーム中、生徒の発言、
	きることになり、関税がかかるこ		つぶやき、行動の様子を
	とになりました。1回(5個10ド		観察することに留意する。
	ルで)売るにあたり、1ドル関税		マーケットでは、一方の
	代をマーケットに支払ってくださ		審査は厳格だが、他方の
			交渉次第で受け付けるよ こはままる
	3、北部のほうで、疫病が流行りだし		う注意する。 先進国など特定の国には
	ました。今、生産していたカカオ		元進国など特定の国には 優遇した審査をするよう
	を全て捨ててください。		陵國した番重をするよう 注意する。→途上国と先
			進国に差をつけて審査す
			ることに注意する。
	 【会社づくりの時間】	 生徒は作業を中断して	 会社作りの時間では、生
		話を聞く	 徒の進行状況を見て、会
			社づくりの時間を設ける
			ことに留意する。
	【イベント内容】		
	4. 国際市場での価格変動があり、カ		
	カオの値段が安くなってしまいま		
	した。マーケットに持って行った		
	時に、値段を確認してください。		
2:10	〈中間報告〉		
\$	5時間目の終りに、各グループどのくら	生徒は稼いだ額をワー	生徒同士が協力して計算
2:20	いお金を稼げたか中間報告を発表する。	クシートに計算し金額	できるよう留意する。
	(ワークシートに結果を記入して発表	を記入する。	
	する)		
	プリントの用紙にも儲け額と反省を		
	ワークシートに記入する。		
		<u> </u>	

指導事項	指導内容(教師の活動)	生徒の活動	留意点
2:20	【10分休憩】		
2:30 5 2:42 (12分)	5. ODA (先進国) からの資金援助がありました。各国に配布しますので、援助を受け取ってください。6. 災害があり、鉄道が使えなくなりました。開通前のように1回に商社に持っていく数を戻してください。数分後、鉄道が使えるようになる。		
	【会社づくりの時間】	生徒は作業を中断して 話を聞く	会社作りの時間では、生 徒の進行状況を見て、会 社づくりの時間を設ける ことに留意する。
2:42 { 2:58 (15分)	〈最終報告〉 作業を止めるように指示する。 各グループでいくらお金を稼げたかを 発表する。 (ワークシートに結果を記入して発表 する) 結果等をワークシートに記入する。	生徒は稼いだ額をワークシートに計算し金額を記入する。	
共有 2:58	貧困の輪やガーナについて話す。実際に、ゲームを通して体験したことで気づいたことを各グループで話し合う。グループ毎に話し合った内容を発表し	生徒が感じたことを話 し合い、また、ワーク シートに記入する。	
	合い、カカオ農園、チョコレート会社 の意見を共有する。(グループ毎に発 表する)		
まとめ 3:05 { 3:20 (15分)	体験した状況から今後(未来)をどう 考え、途上国とかかわっていくかを生 徒に投げかけ、グループごとに話し合 う。 話し合い後、発表させる。 フェアトレードの話をして、現在の状 況を知ってもらう。	生徒は、体験した状況から今後どのようにかかわっていくかを考える。	

生徒の感想

《カカオ豆貿易ゲームを通じて気付いたことや感じたこと》

- ・カカオ豆を生産しても疫病やら値段が安くなったりして利益が出ない。なんて不平等なんだと思っ た。ガーナはこのままじゃ儲からない。
- ・いろんな情報を仕入れて、利益を大きくしたりするのは難しいと思いました。カカオ豆の農家ばかり 損をするのはおかしいと思いました。
- ・カカオの値段が急に安くなったりして生活が苦しいことが分かった。
- ・協力という言葉が深く分かりました。
- ・カカオからチョコレートになるまでは大変なんだと分かった。
- ・チョコレート工場には勝てない。不平等でした。ガーナの人々は貧しいと思った。
- ・ガーナの人たちは優しいなと思った。
- ・貿易のことがちょっとだけ分かったような気がした。
- ・関税のしくみがうまく使えた。2回や3回に分けずに、できたものを貯めて、売りに行くのが良いことが分かった。
- ・少ないお金で生活していて、すごいと思った。
- ・カカオを輸出しないで、ガーナでチョコを作ったら、絶対儲かると思う。

《今後(将来)はどのように途上国とかかわっていくか?》

- ・カカオの価格をあげたほうがいいと思う。
- ・平等に、優しく接する。
- ・食べ物関係で将来かかわりたいと思う。
- ・ガーナの人々に利益があるような貿易を平等になるように考えるべき。
- ・日本ももう少しガーナから輸入すればいいと思う。
- ・チョコをいっぱい食べて何か変わったらいいけど、変わらなくてもそういうことが世の中にあると 思って食べたい。
- ・ガーナにチョコレートを作る技術を教えれば、儲かると思う。

IV. 実践授業の成果

ガーナの子供たちに手紙を出すことを授業で話をすると、何人かの生徒が社会で使っている地図帳を出して、国がどこにあるかを調べ始めた。そのとき、ガーナに関心を持ち始めたことに気づく。

「アフリカのどこにあるの?首都はアクラになっている。」生徒たちの中で、ガーナという国はどんな国なのかを話している。どんなことにおいても、自ら調べたり、教えたりすることを通じて、興味・関心を持ち学習への楽しみを見いだせるのではないだろうかと思う。ある生徒は、家に帰ってインターネットでガーナについて調べ、何かおもしろいサイトを見つけては、「ガーナでサッカーが有名なんだよ」など、私に報告してくれた。この実践を通して良かったと思う点は、生徒が自ら調べて、学んでくれたことだと思う。

また、カカオ豆貿易ゲームでは、生徒から予想していた通りの返答が得られた。ゲームを始めた時は、カカオ豆やチョコレートを作るのに一生懸命頑張っていた。しかし、後半になるとカカオ農園のグループと日本のチョコレート会社との間に不平等があることに気づき始めた。何人かの生徒は「不平等だ。面白くないな。」と不満を漏らした。こう思った瞬間が、ガーナの現状を体験できた瞬間だと思った。しかし、生徒にとってはただの不満にしか残らない様子だったので、貿易ゲームを終えた次の時間、「それ面白く

ない。不平等だ。」と思うことが、ガーナで働く人の思いを体験したのと一緒であることを説明すると、 単に不満を残すためにゲームをしたのではないことを感じ取ってくれたようだった。

今後、どのように関わっていったらよいのか、また、どのような関わり方がよいのかを自ら探して行く ことを行っていければと思う。

V. 課題

- ・手紙の交換をした際、やり取りだけで終わってしまい、日本に戻ってから生徒たちとガーナの子供たちとの間で、何らかの交流を起こせず、終わってしまった。もっと生徒同士で交流を深められるような活動を考えられたらよかったのではないかと思った。
- ・カカオ豆貿易ゲームを終了してから、今後、生徒達に途上国とどうかかわっていくかを自ら考えて調べる時間を、設けられずに報告書を書くことになってしまった。自ら考え調べたことをまとめて発表するところまで学習すれば、総合的な学習の時間としても学習指導要領のねらいの通りに実践できるのではないかと思った。報告会は過ぎてしまうかもしれないが、時間があれば、実施してみたい。

VI. 出典

【インターネット】

フリー百科事典『ウィキペディア(Wikipedia)』カカオ豆 「日本チョコレートココア・ココア協会」ホームページ 「野口英世記念館」ホームページ

【本】

ガーナ 混乱と希望の国 アジア経済研究所

ガーナで知って、考えよう!

氏名	渡邊 太
学校名	福島県福島市立平野小学校
担当教科名	算数、理科、体育T.T
実践教科名	総合的な学習の時間
時間数	2時間×2クラス
対象生徒(学年)	第5学年
対象人数	1組36名、2組36名

関連する学習指導要領の内容と文言

国際理解に関する文言を挙げると、学習指導要領の総則に総合的な学習の時間のねらいが、

- (1) 自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育てること。
- (2) 学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探求活動に主体的、創造的に取り組む態度を育て、<u>自己の生き方を考えることができるようにすること。</u>

とあり、国際理解は学習活動の例として示されていて、さらに、国際理解に関する学習の一環として外国 語活動が示されている。また、総則の第1の2には、

2 学校における道徳教育は、学校の教育活動全体を通じて行うものであり、道徳の時間をはじめと して各教科、特別活動及び<u>総合的な学習の時間</u>のそれぞれの特質に応じて適切な指導を行われなけ ればならない。

道徳教育は、教育基本法及び学校教育法に定められた教育の根本精神に基づき、<u>人間尊重の精神と生命に対する畏敬の念</u>を家庭、学校、その他社会における具体的な生活の中に生かし、豊かな心をもち、個性豊かな文化の創造と民主的な社会及び国家の発展に努め、<u>進んで平和的な国際社会に貢献し未来を拓く主体性のある日本人を育成する</u>ため、その基盤としての道徳性を養うことを目標とする。

とある。併せて教育基本法にある教育の目標には、

五 伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛するとともに、<u>他国を尊重し、</u> 国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うこと。

とある。

実践について

I. 実践の目的

前任校でも、現在勤務している学校でも、国際理解教育ではEAAが指導する英語活動が主で行われて、それ以外で他国の文化を知る時間を設定していても本やインターネットで調べるといった活動が多いと言うのが現状である。EAAが指導する英語活動では、確かに子ども達が楽しんで取り組む姿が見られるが、どちらかと言えば与えられた課題をこなすことが多くなる。また、本やインターネットで外国のことを調べる活動も、調べること自体が目標となり、その先に課題解決的活動が展開されることは少ない。

これは、「国際社会に生きる日本人の育成」を軸として主として「日本の伝統・文化への理解と尊重」「異文化理解」「外国語・外国語コミュニケーション」をめざすといった意味では、問題は無いのかもしれない。しかし、この現状での国際理解教育では、学習指導要領総則に示される総合的な学習の時間のねらい「よりよく問題を解決する資質や能力を育てること」や「自己の生き方を考えることができるようにすること」を達成することは難しいと考えられる。

本研修に参加し、事前研修で講話を聞いたり、ガーナへ実際に行ったりしたことで、学校における国際 理解教育や開発教育の必要性や有効性を強く感じた。

また、児童へ対する事前のアンケートでは、児童のガーナ(アフリカ)へのイメージや知識の乏しさと、 外国への関心の高さを見ることができた。

今回は、5年生対象に90分の単発の授業しか実施することができないので、自ら課題を決めて探求的な活動をするところまでは、活動を広げることは難しいことが考えられる。

そこで今回の授業では、私自身が見て、聞いて、感じてきたガーナを児童に伝えることで、児童がガーナやアフリカに対してもっている漠然として偏ったイメージを、より具体的な情報やイメージに更新させ、ガーナや外国へ対する興味関心をさらに高める。さらに貧困や児童労働といった問題も取り上げることで、児童労働者と児童自身の生活の様子を照らし合わせ、彼らの身になって考えたり、自分の日常について改めて考えたりするきっかけとしたい。

Ⅱ.授業の構成案

対象クラス(各90分)	授業内容
5年1組(36名)	前半:写真や教師の体験談からガーナの様子を知り、衣食住の観点で印象を ワークシートにまとめたり、グループで話し合ったりする。 後半:就学率や児童労働などガーナや世界が抱える問題を知り、子どもが学 校へ行けずに働いているということについて考える。
5年2組(36名)	前半:写真や教師の体験談からガーナの様子を知り、衣食住の観点で印象を ワークシートにまとめたり、グループで話し合ったりする。 後半:就学率や児童労働などガーナや世界が抱える問題とカカオ産業の児童 労働をなくす方法を知り、自分にできることを考える。

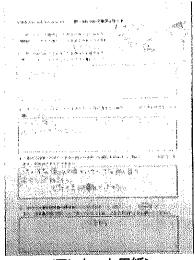
Ⅲ. 授業の詳細

<事前アンケート>(回答者数68人/72人中)

1 学期、夏休みに入る前に、児童にガーナに関するアンケートをとった。

アンケートの結果、問1「ガーナという国がどこにあるか知っているか」に対しては、世界地図に正確に場所を示すことができたのは0人で、アフリカ(一部もしくは全体)に印をつけたのも20人だった。他の児童はアジア(中国など)やオーストラリアに印をつける児童が多かった。

問2 「ガーナについてどんなことを知っているか」に対しては、約81%の児童がガーナについて何も知らないと答え、約12%の児童が「チョコレート」や「カカオ」と答えた。また、草原、野生動物、砂漠、



<アンケート用紙>

緑がたくさん、果物、大変そうなどのガーナと言うよりは、いわゆるアフリカに対すイメージも少数で はあるがでた。

問3「ガーナについてどのようなことを知りたいか」に対しては、ガーナがどんな国か(人口、面積、気候、住んでいる人、言葉など)、どんな生活をしているか(食べ物や料理、洋服、お店)、どんなスポーツや遊びが流行っているか、どんな特産物があるか、どんな勉強をしているか、など自分の生活に身近なこと、自分と照らし合わせることができることが項目として挙げられていた。一方で、「特にない」と答えた児童が16%もいた。

問4「ガーナ(アフリカ)に行ってみたいと思うか」に対しては、「はい」が約62%で、「いいえ」が約38%だった。「はい」の理由として多かったのは、「いろんな国へ行ってみたい」「分からないことを知りたい、調べたい」などで、「いいえ」の理由で多かったのは、「言葉が話せない」「お金がかかるから」「暑そう」「危険がいっぱいありそう」などだった。

問5「青年海外協力隊を知っているか」に対しては「はい」と答えたのが1名だけで、その1名も「聞いたことはあるがそれが何かは知らない」とのことだった。

これらの結果から、多くの児童はガーナついてほとんど何も知らず、知っていることも「チョコレート」や「カカオ」といった限られた情報であること、一部の児童は大変や危険といった偏ったイメージを持っていることが分る。約4割の児童がガーナに行ってみたいと思わないと答えた背景には、「ガーナという国を知らない」ということが大きいとも考えられる。

一方、「知らない」からこそ、知りたいと思い、知りたいことも自分達の日常と比べられるような一般的なことになったと考えられる。また、よく知らないガーナへも「行ってみたい」と答えた児童が約6割もいたことから、児童の外国への関心の高さが伺える。

また、今回のアンケート結果から、児童がガーナやアフリカに関わる貧困や児童労働などの問題についても知らないことが推測される。

<授業の前半部分>

前半のガーナの紹介では、児童が、まずはガーナがどんな国なのか、気候や生活など一般的なことを 知りたいと思っているというアンケート結果から、私が実際に現地へ行き見て、聞いて、感じてきたガー ナを「衣」「食」「住」「学校」の観点に分けて、現地で撮ってきた写真を示しながら、紹介した。

児童にはワークシートを使わせ、まず始めにガーナの位置や、公用語、宗教、気候、国民総所得など

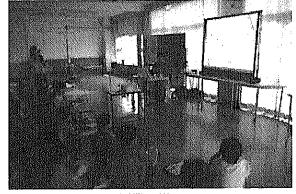
地図や言葉、数字の情報を提示し、その段階で知っていることやその情報から推測できるようなガーナがどんな国かのイメージを(できれば衣食住の観点で)書かせる。そして、衣食住・その他の観点でガーナを紹介したあとに、改めてガーナがどのような国だと感じたか、あるいはどんなことが印象に残ったかを書かせる。2段階に分けてガーナがどんな国かを書かせることで、児童に自分の中でガーナと言う国に対する知識やイメージが広がったことを実感させたいと考えた。

また、自身のワークシートに書かせるだけではなく、共同的な活動として、クラスの生活班に分かれて、ガーナがどんな国かをワークシートと同じように2段階で話し合わせ、メモ紙にキーワードを書いて、大きな台紙に衣食住のグループ分けをして貼らせるという活動を入れた。この活動では、各自がもったイメージの共有と共通体験からの情報交換による自己肯定感や他者理解をねらいとした。(参加型手法:カード式整理法)

まず始めにガーナの就学率69%の「69」という数字を提示し、それがガーナの何を表す数字かを予想した。(ちなみに答えは後半部分で明らかになる)

子ども達の反応としては、人口やチョコレートの生産量、都市の数などがあがったが、予想できたのは一部の児童だった。

次に、ガーナについて知っていることや、地図や言葉、数字のデータからのイメージの主なものは、



<拇業の様子>

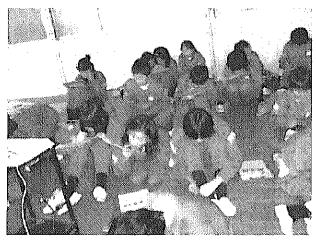
- 「衣」⇒「服がボロボロ」「きたない」「変な色・模様の服」「服の色がとてもカラフル」「甚平と浴衣が一緒になったもの」「明るい色でオ
 - 模様の服」 |服の色がとてもカラフル」 | 基平と浴衣が一緒になったもの」 |明るい色でオシャレ」 「民族的」 「スカートみたいなもの」
- 「食」⇒「木の実やカカオを食べている」「食事に困っている」「果物がいっぱいある」「チョコレートを毎日食べている」「カカオ豆で作った料理」
- 「住」⇒「とても人口が少ない」「小さな国」「暑い(赤道直下だから)」「アパートが少ない」「花がいっぱいありそう」「テントみたいなもの」「きれいな家」「日本みたいに都会じゃない、自然の国」「昔の日本みたいなところ」「海がきれい」「ハワイみたいに暖かい」「雨が降りやすい」
- 「その他」⇒「肌が黒い」「貧しい」「チョコレートがたくさんある」「民族がたくさんある」「サッカー」「民族による戦争がありそう」「ガーナ特有の病気がありそう」「学校が少なそう」

これが、ガーナの写真を見ながらと教師の説明を聞いた後には次のような印象に変わっていた。

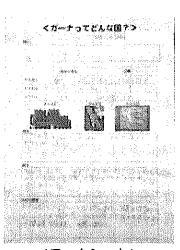
「衣」⇒「オシャレ」「派手」

- 「食」⇒「珍しい食べ物がある」「いろんな食べ物がある」「フルーツがたくさんある」「おいしそうなものが多い」「日本にはない食べ物があった」「辛い食べ物を食べている」
- 「住」⇒「緑も多くて豊かな国」「意外と活気のある町」「結構ふつうの家がたくさんある」「お店が いっぱいある」「にぎやか」
- 「その他」⇒「優しい国」「優しい人がいっぱい」「みんな親しく良くしてくれる国」「貧乏」「貧しい国」「笑顔がいっぱい」「子どもがたくさんいる」「他の国の人が来たら歓迎してくれる」「やはりチョコレート」「学校の授業が多い」「みんながいつも協力して、いつも笑っ

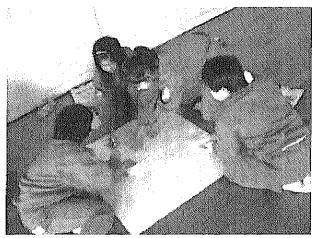
ていていいな」「ガーナの人はふれあいやすい」「日本の子どもと違いよく外で遊んでいる」「なんでも手作業でつくりそうな国」「ちゃんと夢をもっている」「ガーナの人はとても面白い」「頭がいい人が多い」「いろいろなことをやっている国」「とても幸せ」「年上の人に逆らえない」「日本と特にかわっているところがない」「子どもは働き者」「子どもがたくさんいて楽しそう」「結構文化が発達している」「明るい生活を送っている」「みんな自分でお手伝いしている」「黒人がいっぱいいた」「不自由ない国」「ちょっと悪そうな国」「ちょっと大変そう」



<ワークシートに記入している様子>

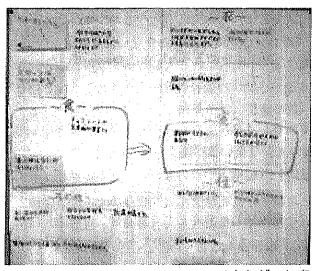


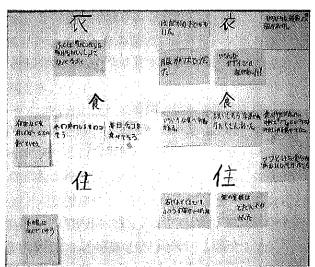
<ワークシート>





<班活動の様子(カード整理法)>





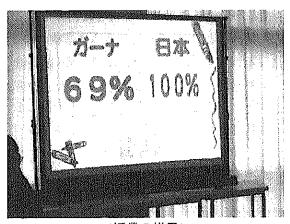
<できあがった表(カード整理法)>

ワークシートをもとにして行った班活動は、教師の説明が分りづらかったのと、児童に同じような活動の経験が少なく要領をえられなかったことから、取りかかるまでに時間がかかり、ワークシートに書かれているようなことを出し切れずに終わってしまったグループが多く見られた。また、2段階で、ガーナのイメージや印象に残ったことをキーワードとして衣食住などにグループ分けすることで、ガーナに対するイメージや知識の広がりを感じられるはずが、キーワードとして挙げられた言葉のグループ分け自体がなかなかできない班が多く、班活動の中でイメージや知識の広がりを感じるというところまでは活動は深まらなかったようだった。それでも、活動の後半になると要領を得てきてだんだんと活動に盛り上がりが見られる班も増えてはきていた。

<授業後半部分:5年1組>

後半部分は貧困や児童労働、学校で勉強することの 必要性について考えさせるという同じねらいで、1組 と2組で展開を変えて行った。

1組では、ガーナの就学率が69%だというところから、学校に行けない理由、街で働く子ども達の様子(明るく笑顔で物売りをしている)、児童労働の定義と実態(ガーナでは5~14才の57%が児童労働に従事している)、カカオ農園での子どもの仕事や1日の生活の様子、世界における児童労働の実態(2億1800万人)、働く子ども達が学校で勉強をしたいと望む一方で自らの生



<授業の様子>

計を立てるために自分たちが作った商品を買ってほしいと願っていること(クダンプール宣言)、ガーナの識字率や字が読めない計算ができないことによる弊害といった順序で話しを進めていき、最後に「あなたは子どもが働くことを認めるか?子どもが作った商品を買う?買わない?」という問いを投げかけた。

その問いに対する答えは以下の通りである。

子どもが働くことを認めるし、子どもが作った商品も買う…………16人 子どもが働くことは認めないが、子どもが作った商品は買う………14人

子どもが働くことは認めるが、子どもが作った商品は買わない……… 1人

その他、子どもが作った商品を買うとだけ答えた児童が1人

子どもが作った商品は買わないとだけ答えた児童が1人

(計33人)

「子どもが働くことを認める」と答えた理由としては、「あくまで家庭のためなら」「働かないと生活ができないから」「かわいそう」などの答えが見られた。

一方、「子どもが働くことは認めない」と答えた理由としては、「子どもはこれからの時代を生きていくのでちゃんと教育を受けた方がいいと思うから」「危険だし、かわいそう」「勉強しなかったら、その子ども達の将来が奪われてしまいかわいそうだから」などの答えが見られた。

次に、「子どもが作った商品を買う」と答えた理由としては、「子どもが頑張って作ったものを買ってあげたい」などの答えが見られた。その中には、「子どもが一生懸命に作ったものだから、自分だったら買う。売る立場だったら買ってほしいから」というふうに、働く子どもの立場になって考えることができた児童もいた。

<授業の後半部分:2組>

2組では、子どもが作った商品を買うことを認めるか?認めないか?ではなく、児童労働をなくすために自分にできることを考えるというところに重点を置くために、「クダンプール宣言」の部分は抜かして、「あなたは子どもが働くことは良いことか?子どもが作った商品を買う?買わない?」と問い、次に「ガーナで働く子どもたちと私たちは関係がないのだろうか?」というところか、日本のカカオ豆輸入の70%がガーナからであること、日本人が1人年平均2.2kgのチョコレートを食べていることを説明した。そして、私たちに何かできることはあるだろうかということで、「ガーナのカカオ産業から児童労働をなくす9つの方法」を紹介した。(参加型手法:ランキング)

本来なら、ここで「自分にもできそうなこと」という観点で ランキングをして、その理由などを話し合う予定だったが、今 回は時間がなくなってしまい、ランキングをする作業は宿題と して課することになってしまった。



<自分にもできること ランキング用紙>

宿題で提出されたランキングの結果は次の通りである。(数字はその順位に選んだ人数)

		1位	2位	3位
A	図書館やインターネットで「児童労働」について調べたり、勉強したりして、知識をつける。	14	8	1
В	日本政府にもっと「児童労働」の問題に取り組んでほしいと、署名を集 め、その声を日本政府に届ける。	1	0	4
С	多くの人に「児童労働」の問題を、新聞やテレビなどを通して訴えかけ る。	2	2	3
D	「児童労働」をなくすためのイベントに参加する。	1	5	4
E	「児童労働」によって作られていない「フェアトレード」のチョコを作っ てほしいと、企業に手紙を送る。	1	1	1
F	普通のチョコよりも高くても、「児童労働」で作られていない「フェアト レード」のチョコを買う。	0	11	6
G	「児童労働」をなくすために活動している団体を支援する。(募金・寄付 /ボランティアをする)	4	1	5
Н	カカオ産業の「児童労働」について、身近にいる人たちと話す。	9	3	6
	その他に自分で考えた方法。	0	1	2

Aを選んだ理由では、「大きなことはできなくても調べて、やれることをなるべくやりたいから」などがあり、中には、「知識をつければ他のいろいろなこともできるから」と考える児童も見られた。

Hを選んだ理由では、「話せば少しでも「児童労働」のことを知ってもらえ、協力してくれる人が増えるかもしれないから」などが見られた。

Fを選んだ理由では、「チョコレートはよく食べるから自分にもできそうだから」などが見られた。

AやHやFが多く選ばれたところから、児童がインターネットや図書館、親や友人を身近だと感じていることが分るし、そこからも、彼ら達なりに「自分にもできそうなこと」という観点で「児童労働」というガーナや世界、そして私たちが抱える課題の解決方法を考えることができたと思われる。

<感想>

ワークシートに書かれた感想を見ると、1組2組ともに大きく分けて3つの傾向に分類することができた。1つ目は、ガーナ人の明るさや、文化に対して良い印象を受けたというもの。2つ目は、ガーナの貧しさや児童労働について大変だと感じたこと。3つ目は、ガーナの良さも大変さもどちらも感じたというものである。人数的にも、この3つの傾向にだいたい3等分された。

<授業後のアンケート>

後日、「授業に参加して、もっと知りたいと思ったことや、調べてみたいと思ったことがあったら教 えてください」ということでアンケートをとった。その結果は次の通りである。

食べ物に関すること 14人 ガーナの子どもたちに関すること (教育や児童労働など) 9人 ガーナの生産物に関すること 7人 カカオ豆やチョコレートに関すること 6人 フェアトレードチョコレートに関すること 2人 その他 10人 特にカレ 15人
特になし············15 人 (計72人)

Ⅳ. 成果

- 今回の授業を通して多くの児童は、ガーナの衣食住や学校の様子を知ることで、ガーナの生活や文化への関心を高めることができ、ガーナの生活や文化と自分たちの生活や文化を比べて見ることで、自国の文化を意識するきっかけにもなったと考えられる。
- 今回の授業でガーナの就学率や識字率、児童労働の問題を扱ったことで、多くの児童が初めて世界の不平等について知り、考えることができた。国際社会の平和を考えるためにも、世界の不平等、世界が抱える問題について知るということは必要不可欠であることを考えれば、今回の授業で、ガーナや世界の識字率や児童労働の現状を知ったことは、国際社会への課題意識をもつきっかけにもなると考えられる。また、自分達と同じ「子ども」が置かれている厳しい現実を知り、そのことについて自分の生活と比較して考えたことは、学校で学ぶことができない子どもたち、児童労働に従事させられている子どもたちに対する思いやりの気持ちをもつことに繋がった。

V. 課題

今回、各クラス単発の90分授業だったため、内容を詰め込み過ぎ、前半後半ともに、お互いの考えを伝え合う時間を充分確保できなかった。ワークシートに書かれた児童の感想などを読むと、その感想から、お互いどんなことを感じるかを話し合うことでガーナという国の特徴や児童労働などの問題についてより深く考えることができたと考えられる。また、カード整理法やランキングなどの参加型手法も互いの考えを交流させる時間をしっかり確保することで、より充実した活動となり、その結果、よりよく問題を解決する資質や能力の向上や、自己の生き方を考えることにもつながっていくと考えられる。

このことから、国際理解教育、そして開発教育は単発ではなく単元計画をしっかり立てて取り組むことが今後の課題となる。

VI. 出典

- 小学校指導要領 総則
- 新小学校指導要領 総合的な活動の時間 解説編
- 〇 「新学習指導要領ポイント総整理」 東洋館出版社編集部 著
- 「ほっとけない世界のまずしさ」扶桑社
- 「わたし8歳、カカオ畑で働きつづけて。
 - ~児童労働者と呼ばれる2億1800万人の子どもたち~」 児童労働を考えるNGO=ACE 岩附由香+白木朋子+水寄僚子 著 合同出版社
- 「世界から貧しさをなくす30の方法」 田中 優・樫田秀樹・マエキタミヤコ 編 合同出版
- 「教室から世界へ」JICA中部
- 「クロスロード」2008.6 JICA
- 外務省ホームページ
- ガーナ大使館ホームページ
- DEAR開発教育協会ホームページ
- 特定非営利活動法人ACEホームページ
- ACE 開発教材 「おいしいチョコレートの真実」
- 特定非営利活動法人フリー・ザ・チルドレン・ジャパン ホームページ
- チョコレート協会ホームページ
- 世界がもし100人の村だったら4 ホームページ

国際理解教育から開発教育へ

庄子 弘幸		
宮城県名取市立第一中学校 外国語(英語)		
総合的な学習の時間 2時間(全校集会 1 時間, 各クラス 1 時間)		
選択英語 2時間(3年生)		
1年生175名 3年生35名 全校生徒521名		

関連する学習指導要領の内容と文言:外国語

- 1 外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深める。
- 2 外国語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成をはかる。

特別活動の目標

- ・社会的な資質の育成
- ・人間としての生き方の自覚と自己を生かす能力の涵養

総合的な学習の時間の取扱

- (1) 自然体験やボランティア活動などの社会体験、観察・実験、見学や調査、発表や討論、ものづくりや生産活動など体験的な学習、問題解決的な学習を積極的に取り入れること。
- (2) グループ学習や異年齢集団による学習などの多様な学習形態、地域の人々の協力も得つつ全教師が一体となって指導に当たるなどの指導体制、地域の教材や学習環境の積極的な活用などについて工夫すること。

I. 実践の目的

名取市では、ALTを招いてのティーム・ティーチングの授業を本格的に始めるようになって、15年になる。 JTEがおおまかな流れを組めばALTは楽しく授業を進めてくれるので、英語圏の生活について知り、英語に親しむというねらいは達成していると思われる。それがそのまま国際理解教育を行っているような錯覚を私はもっていたことも事実である。

しかし、日々の授業実践のなかで、先進国ばかりではなく発展途上国の様子も知るべきではないかと考えるようになってきた。発展途上国の様子については、社会科の授業で少し取り上げられているが、わずかに学習する程度である。あるいは、道徳の授業にも国際理解に関する資料はあるものの、他の読み物資

料と同様で、現実味のないものがほとんどである。したがって発展途上国に関心を広げさせようと思っても、時間が十分に確保されず単なる知識で終わってしまうのが現状である。そもそも発展途上国の生活の詳細については教師サイドでも情報不足で、どうしていいのか分からない状況であった。

私自身がイメージしていた発展途上国は、「アフガニスタン難民」にかかわる写真や記事であった。アフガニスタンで必要なのは「水」「食料」「平和」。そこで活躍する中村医師は医療行為よりも、井戸掘りの作業に重点を置いている。そんな姿を思い描いていた。けれども、不思議なことに、子ども達の笑顔がひときわ輝いていたことも見逃せなかった。粗末なものでも食事ができる喜び、遠いところまで水をくみに行って親からほめられる喜び等。これらは、貧しい生活特有の幸福といえる。つまり、発展途上国というと、何か支援活動をしなければならないという考えに陥りやすいが、日本が学ぶべきことも見いだすことができるはずである。

私は今回、教師海外研修に参加し、ガーナ共和国で研修することができた。「理数系を中心とした学校教育の遅れ」、「奴隷貿易の歴史」、「エイズ対策」、「大都市と地方の収入の格差」、「食文化の違い」など生徒に生きた資料を提供できると考えた。

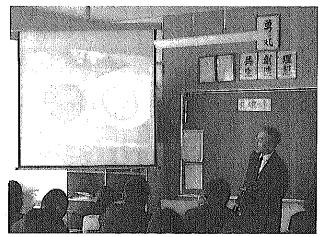
Ⅱ.授業の構成案

教科・領域・テーマ・ねらい等	方法・内容	使用教材
学活 5時間 (1年生各クラス 1時間×5) ・「食文化の違い」	☆栄養教諭とのティーム・ティーチング ①食事の正しいマナーについて理解させる。 ②異文化を理解させる。 ③クラスメイトの考えを聞き、他者理解を深 め、自分の意見を発表させる。	・写真 ・実物 ・ハンドアウト
総合的な学習の時間 「ガーナ紀行 」 1 時間	☆全校集会 ①ガーナについて理解させる。 ②異文化を理解させる。	・写真・実物
総合的な学習の時間 「ガーナ紀行」を聞いての感想 1時間	☆全学年全クラスでの担任による授業 ①ガーナについての話を聞いての感想を書かせる。 ②疑問に思ったことを質問させる。 ③自分の感想を発表させる。	・ハンドアウト
選択英語 1時間(3年生1クラス) ガーナの学生への手紙	☆英作文 ①教師海外研修の意義を理解させ、自分でで きる(書ける)英語の手紙を書かせる。	・ハンドアウト ・和英辞書
1時間(3年生1クラス) ガーナの学生からの手紙	☆英文読解①ガーナから来た手紙を配り、自分で英語の手紙を読ませる。②ガーナという国や人について理解させる。	・ガーナからの手紙・英和辞書

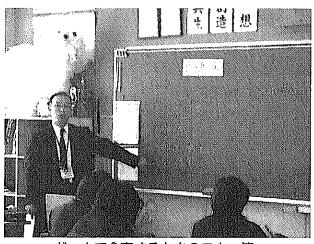
Ⅲ. 授業の詳細

学活「食文化の違い」

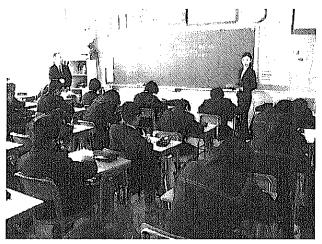
段	教師の支援・留意点		爰・留意点	207/JT (6) \$50 lb	2000 At At 46
段階	学習活動	Т 1	T2	評価の観点	資料・準備物
	1. 学習テーマの	・食文化の違いに	・板書する。	・集中して授業を	・ワークシート
導入	確認をする。	ついて考えさせ		聞いているか。	
(3)	「食文化の違い」	たい。			
分		・ワークシートを			
		配る。			
	2. ガーナの食事	・映像や写真	・机間指導。	・興味を持って聞	・プロジェク
	風景を見る。	(ガーナ)を提		くことができた	ター
		示し、興味を		か。	・パソコン
		持って聞くこと			
	3. ガーナの食文	ができるように	・発表したことを		
	化について発表	話す。	板書する。	・ガーナと日本の	
	する。	「ガーナの主食は		食文化の違いに	
	·	何ですか?」	・板書する。	ついて気付くこ	
	•	等。		とができたか。	
展 開	4. 日本の食生活	・発表者には、大	・配膳の仕方、箸		
32	について振り返	きな声で発表す	の持ち方につい	・配膳の仕方、箸	・料理カード
分	る。	ること、聞く側	て説明する。	の持ち方につい	• 箸
		はしっかり聞		て確認できた	
		き、メモをとる		か。	
	5. 日本の食事の	ように話す。			
	マナーについて	「日本の主食は何			
	確認する。	ですか?」等。			
		・日本には食に関			:
		するどんなもの			
		があるか発表さ			·
		せる。			
	6. 今日の授業の	「授業の感想を書	・机間指導をす	・はっきりとした	・ワークシート
#	感想を書く。	きましょう。」	る。	声で発表できた	
まとめ	7. 発表する。	・机間指導する。		か。	
1 1	·	・指名する。			· .
15 分	8. まとめの話を		•	・食文化について	
	聞く。	·	・まとめの話をす	意識を高めるこ	
			る。	とができたか。	·



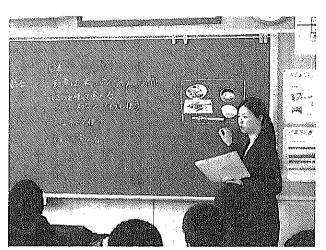
ガーナの食事



ガーナで食事するときのマナー等



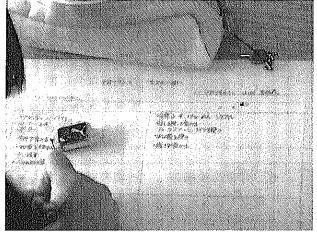
ガーナと日本の食文化の違い



日本の食文化のまとめ

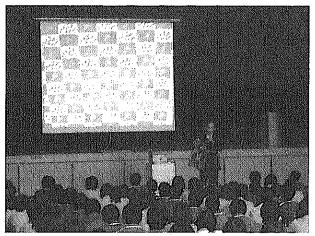


箸の持ち方を再確認

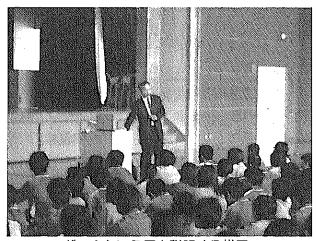


食文化の違いをまとめて感想を書く様子

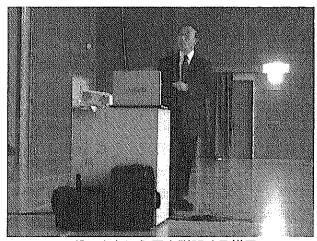
全校集会



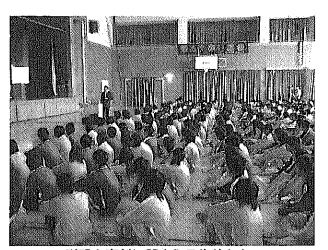
ガーナで作った布を紹介する様子



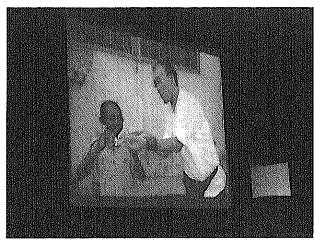
ガーナという国を説明する様子



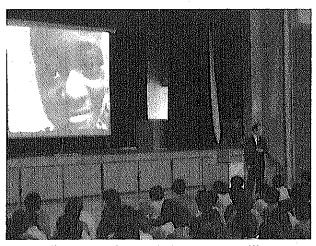
ガーナという国を説明する様子



説明を真剣に聞き入る生徒たち



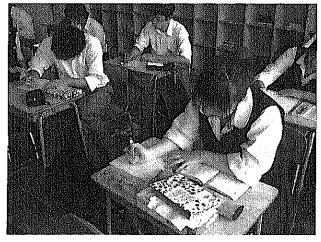
子どもに折り紙を教える様子

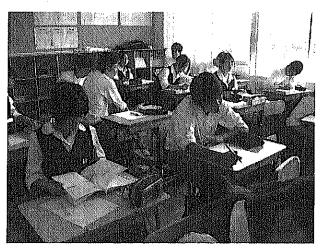


「豊かさとは何か?」と問いかける様子

3年生選択英語 1時間目

段階	学習活動	教師の支援・留意点	評価の観点	資料・準備物
導入 (10分)	1. 学習テーマの確認を する。 「ガーナの友だちに手紙 を書こう」	・国際理解について話を する。 ・教師海外派遣研修に行 く意義を伝える。	・集中して授業を聞いているか。	・本 「われら地球 家族」
	2.英語で手紙を書く。	・黒板に書き方のサンプ ルを書いて紹介する。 ・机間指導。	・興味を持って聞くことができたか。	・プロジェク ター ・パソコン
展開 (37分)	 3. ガーナの食文化について発表する。 4. 日本の食生活について振り返る。 	・発表したことを板書す る。 ・板書する。	・ガーナと日本の食文化 の違いについて気付く ことができたか。	
	5. 日本の食事のマナー について確認する。	・配膳の仕方、箸の持ち 方について説明する。	・配膳の仕方、箸の持ち 方について確認できた か。	・料理カード ・箸
まとめ (3分)	6. 今日の授業の感想を書く。書く。7. 発表する。	「授業の感想を書きま しょう。」 ・机間指導する。 ・指名する。 ・机間指導をする。	・はっきりとした声で発 表できたか。	・ワークシート
分	8.まとめの話を聞く。	・まとめの話をする。	・食文化について意識を 高めることができた か。	





ガーナの学生に手紙を書く3年生

3年生選択英語 2時間目

段階	学習活動	学習活動教師の支援・留意点評価の観点		資料・準備物
導入 (10分)	 学習テーマの確認を する。 ガーナの友だちからの 手紙を読もう」 	・ガーナへ行って来た感 想を述べる。	・集中して授業を聞いているか。	・写真
展開 (32分)	2.英語の手紙を読む。	・机間指導。 ・Student-teacherを利用 する。	・興味を持って英語の手 紙を読むことができた か。	・英和辞書 ・ガーナから の手紙
まとめ	3. 今日の授業の感想を 発表する。	・指名する。	・はっきりとした声で発 表できたか。	
(8分)	4. まとめの話を聞く。	・まとめの話をする。	・異文化について意識を 高めることができた か。	

☆授業以外の取り組みや資料等

学年通信 平成20年8月27日発行

ガーナに行ってきました

私はこの夏、ガーナに行ってきました。ガーナは西アフリカの熱帯雨林の国です。ガーナの人たちの生活や学校は日本とずいぶん違っていました。日本人にとっては、有名な野口英世博士が、黄熱病の研究を行い、自分も黄熱病に感染してしまい、志し半ばにして亡くなった国としても知られているところです。また、「ガーナチョコレート」という名前が定着しているように、カカオの産地でもあります。写真もたくさん撮ってきましたので、そのうち集会等で、お話したいと思います。







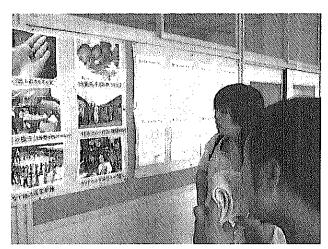
国際理解 ~日本人としての誇りを持って~

ピエール先生が今週から閖上中学校に勤務することになりました。その次は増田中学校へ行きます。一中に来て、また英語を教えてくださるのは、来年の1月になります。一中の2学期は行事が多く、その一つに大変感動したようです。記録写真もたくさん撮っていました。

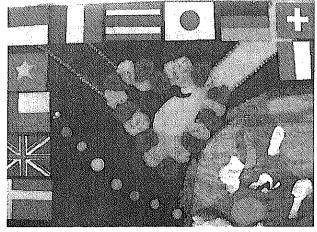
ところで、今、廊下には私がガーナに行った時の写真を掲示しています。また各クラスで、栄養教諭の 佐藤愛美先生とティーム・ティーチングで食文化の違いの授業を行っています。

私はみなさんに英語を教えていますが、英語は今や世界で欠かせないコミュニケーションの道具です。ガーナでも現地語がたくさんありますが、英語が基本でした。私はガーナにいたときはもちろん、ALTと話すときも、日本人としての誇りを胸に意見を言うようにしています。例えばピエール先生はフランス人の背景を持つカナダ人です。日本で生活をし、仕事をしていると、「こうしてはどうか。なぜ…しないのか。」というものが必ずあります。私は多くの外国人と接し、いろいろな体験をするうちに、心から日本人の良さを見直すことができるようになりました。国際的な立場に立ち会うほど、その気持ちは私の支えになっていくと思います。

英語を学び教えている私は、日本人が大好きです。日本人の奥ゆかしさ、誠実さ、几帳面さ、繊細さ…。そういうものが外国の価値観に影響されて失われていくことを悲しく思います。英語教師の私がこんなことを書いていいのかという気もしますが、それが正直な気持ちです。英語を勉強するのと同時に、「外国人に対して気後れしない」「日本人としての誇りを持つ」「先人たちの誇りをけがすような行動を絶対にしない」。こうしたことをみなさんにわかってほしいと願っています。



文化祭での掲示



国際協力をイメージした絵画(1年生)





学年の廊下に掲示

IV. 実践の成果

今年度、私が教師海外研修に参加したことにより、国際理解を推し進めなければならないという雰囲気は職員にも出てきた。また、国際理解というとアメリカやカナダ、オーストラリアなどの先進国を思い浮かべている生徒も多かった。しかし、発展途上国に目を向けるきっかけとなったことは事実である。また、外国人とコミュニケーションを図りたいと熱望し、英語に対して以前よりも興味を示す生徒も増えてきた。

1年生の私の生徒たちが、文化祭で国際協力をテーマにジャンボ絵画を制作したり、3年生のクラスの文化祭の演劇で、国際協力について取り扱ったものがあった。題名は「グローイング・アップ」。題名通り成長していく中で、忘れかけていたものを少しずつ取り戻していく物語で、シナリオもオリジナルであった。日本人がかつて当たり前に行っていた助け合いの劇である。完成度の高さに、参観する人々も涙していた。

V. 今後の課題

「そんなに途上国にくれてやるカネがあるんだったら、俺たちにくれ。」国会議員の中でも積極的に政府開発援助(ODA)の意義を説くYさんは、こんな反応が一般的な有権者を前に、言葉を詰まらせてしまうという。

たしかに、気の遠くなるような財政赤字にもかかわらず、日本の援助関係者は「援助はよいことだ、だから行うことは当然だ」との前提で、物事を考えすぎているのかもしれない。なかなか、ODAをはじめ途上国への援助の真の支持者が増えないのは、そうした理由がありそうだ。

日本の人々をとりまく次のような状況は、中央と地方の所得格差の問題である。こうした国内の格差はもちろん深刻であり、その縮小が政治の責任であることは間違いないが、30カ国ほどの先進国と、150を超える途上国との経済的格差が、日本国内のそれと比較できないほどに大きいという点だ。途上国側の責任と言ってしまえば議論は進まないが、富の大半は一部富裕層に偏在し、他方、多くの国では、セーフティーネットとしての生活保護制度すら整備されていない。日本では、大学進学率が50%を超えようというのに、途上国では、小学生でさえ労働力として必要とされ、満足に学校へ行けない子供たちが多数いる。その上、少なくない国々では、未だに戦火が絶えず、人々は難民となって故郷を離れている。途上国の貧困が内線や地域紛争によって助長されているのだ。日本が自己完結の国で、途上国をはじめとした世界各国に依存せずに、現在の生活レベルを維持できるのであれば、これら貧困にあえぐ途上国に無関心であってもやむをえない。しかし、説明するまでもなく、エネルギー自給率一つとっても20%(原子力を除くと5%)にすぎず、途上国との友好関係なしに日本は存在しえないのだ。

(草野 厚 著 「日本はなぜ地球の裏側まで援助するのか」より抜粋)

新学習指導要領(平成21年度移行措置開始、平成24年度完全実施)の道徳では内容項目4の(10)に「世界の中の日本人としての自覚をもち、国際的視野に立って、世界の平和と人類の幸福に貢献する。」がある。しかし、1年に35時間の道徳の授業のうち、年に数回の国際理解に関する授業を行ってもそれほどの印象は生徒には残らない。また、私たちの学校の校務分掌には国際理解教育がある。しかし、実際には絵に描いた餅のごとく、ほとんど活動していないのが現状である。

私たち教員にとって、あらゆる場面を見つけて、国際理解について、考えさせることは大変重要であり、 21世紀に生きる生徒たちに考えさせることこそ私たちの使命である。

そのために、前述の草野 厚氏の言葉ではないが、私たち教師が国際理解について常に考え、国際的な立場で生徒に物事を考えさせるようにすることが今後ますます大切になってくると考える。

教員の世界は閉鎖的であり、ややもすると他に授業を見られるのを嫌う傾向もある。そこで、私たち教師海外研修を経験した教員が中心となり、積極的に授業実践し、他の教員に提供することが必要である。また、授業の模様をDVDにして保存し、いろいろな人々に自由に見てもらうことも一つの方法だと考えている。そして一人でも多くの教員に国際理解教育を実践してもらうことが責務である。

生徒に国際理解について考えさせることが普通のことになれば、「それでは、自分たちにできることは何か。」と発展することになり、それが開発教育につながっていくと思う。

また授業だけでなく、学校内外で機会を見つけて、保護者や一般の人々を対象に話をする場やワークショップする場を設けて研修し、それを社会に還元させ、あらゆる日本人が、国際協力を常に意識することが理想であり、今後の日本のありかたなのではないだろうか。

VI. 出典

「日本はなぜ地球の裏側まで援助するのか」 草野 厚著 朝日新書